愛知工業大学研究報告
第 50 号　平成 27 年

「障害者」という呼び名を考える

What do we call ‘people with disabilities’?

伊藤　泰子†,
Yasuko ITO

Abstract What do we call “people with disabilities”? Several calling names for “people with disabilities” contain past particles such as ‘impaired’, ‘disabled’, ‘handicapped’, ‘challenged’, and ‘gifted’. Past particle (=-ed) refers to three kinds of meanings, passive meaning, the present(past) perfect, and having a particular feature. These past particle expressions affect people with disabilities. They are unable to dream their own future because these calling names restrict themselves to act as a person. Then, I suppose that people with disabilities are preferred to have a calling name with verbs of action.

１．はじめに

前年度の愛知工業大学研究報告第 49 号では、「聞こえない人」と呼ぶことが聞こえる人と聞こえない人との間で上下関係を想像させ、聞こえない人に劣等感を与えていたので、対等な人間関係を生み出す「手話者」という呼び名を提案した。本稿では前年度の続きとして、「障害者」という呼び名について考えてみたい。

聞こえない人も「聴覚障害者」と呼ばれることが多い。「～障害者」という表現が多くある。日本語で「障害者」「障碍者」「障がい者」などと表現されているが、英語では disabled, impaired, handicapped, gifted, challenged などの単語が使われてきた。これらの英語の表現を検討していく。

２.「障害者」と呼ばれることに疑問

２・１　乙武さんの twitter

乙武洋匡氏が twitter で障害者という呼び名について疑問を投げかけている。「障がい者」と「害」をひらがなにしても「障」も問題ではないかと言っている。乙武氏といえば、『五体不満足』[1)]という本のタイトルで自分を表現した。

†　愛知工業大学　基礎教育センター　非常勤講師

英語ではタイトルは No One’s Perfect[2)]となっている。障害があることは「五体満足」ではないことかと問いかけている。

人工内耳装用者 3)が自分を「サイボーグ」と呼んでいるノンフィクション小説がある。このように障害者自身が障害者と呼ばないことはこの呼び名が問題であることを示す。

２・２　「障害者」を表す英語表現を分析

「障害者」を表す英語表現は an impaired person, a handicapped person, disabled people, gifted children with learning disabilities, physically challenged などの表現は過去分詞で 「被った人」を示す。「欠陥を与えられた人」「ハンディキャップを与えられた人」「天からの贈り物を与えられた人」「チャレンジすることを与えられた人」となる。そして、people with disabilities は「障害を持っている人」となり、すべての表現が、その状態を一枚の絵にしたような名札と思える。この名札がレッテル、ラベルとなるように思える。

過去分詞は形容詞的役目があるので、どのような人であるかを説明して、その人のイメージを与えて限定する。固有名詞は限定するが、固有名詞以上に、これらの障害者を表す英語表現は限定したイメージを与える。たとえば、ある場所で「明日、障害者の伊藤さんがお見えになります」と告知するとき、伊藤という固有名詞の名前より、障害者という呼び名が限定したイメージを前もって

愛知工業大学研究報告,第 50 号, 平成 27 年,Vol.50,Mar,2015

与える。

２・３　呼び名が示す人間関係

限定したイメージを与える呼び名は人間関係に影響する。誰もが自分が劣等感を持つマイナスのイメージの呼び名を望んではいない。呼び名について考えている文学作品がある。

『赤毛のアン』[4]では主人公のアンは、養女にきた家で「コーデリアと呼んで」と頼むが、その名前が却下されると、「では、最後に e のついた Anne と呼んで」と頼む。最後に e がついてもつかなくても音としては変わらないが、最後に e をつける呼び名で呼ばれることを望む。おそらく、e のついた名前で呼ばれたときの本人が想像するイメージが良いからであろう。

アメリカやカナダなどで deaf ではなく、大文字の Deaf[5]と表現して、「ろう者」を（日本語でも「聾者」をひらがなの「ろう者」にする）表している。これも大文字にすることでアイデンティティを表す集団名になり、自分たちを誇りに思うことができるからではないだろうか。

マッカラーズ [6]の作品の主人公である、ろう者の名前をマッカラーズは Singer とした。耳が聞こえないから歌うことができないのに皮肉な名前だと考えることもできるが、Singer と名付けた作者には深い思いがあると筆者は考える。ただ、「歌手である」状態というのではなく、「歌う人」を意味するのではないだろうか。耳が聞こえなくても手話で、リズムで、表情や動作で歌うことはできるという積極的な意味を含めて主人公の名前を作者は決めたのではないかと筆者は想像する。

Francis Itani[7]の小説 *Deafening* の最初の場面では、祖母が耳の聞こえない孫娘に名前を言えるようになることが重要だと言って、グローニアという名前を発音練習させる。たしかに社会では私は誰であるかが一番初めに相手に与える情報であり、その固有名詞が自分を表す。しかし、これらの固有名詞は相手との人間関係を上下関係にはしない。固有名詞はその人１人を意味するのであって、「障害者」という呼び名のように同類としてまとめた呼び名ではないから、上下の人間関係を示さない。

では、呼ばれる側が望む、上下の人間関係を示さない、本人が被るのではない「障害者」にかわる呼び名は何かを次に考える。

３．写真のような名札的呼び名

私たちは「障害者」という言葉を聞くと、障害者のイメージを頭の中に思い浮かべる。しかし、障害者に会ったこともない人でも障害者のイメージを思い浮かべるのは、障害者について知識として知っているからである。『声の文化と文字の文化』[8]の中で「ことばは書かれたものの形で脳裏に浮かび続ける」とあるが、私たちの頭の中で「障害者」というイメージが写真のようにレッテルとして残っているのではないか。だから、時間の流れの中でもそのレッテルの名札は一枚の写真のように、長期間変わらず残る。その写真のような名札で呼ばれた人は、自分の体に否応なしに一方的に「障害者」という名札を貼られてしまう。そして、自分は障害者であるという自覚をもつことを強制される。

英語では過去分詞を使った受動態の形で「欠損を被った人」と名札を貼られると、欠損がある不完全な人間で哀れむべき人と、多くの人に思われてしまう。本人がそのような哀れむべき人だと思っていなくても、そのようなイメージで見られることになる。

田中 [9]は「社会的差別の土台の原点をなすものはからだから発している。なぜなら、からだは原則的には変えることができないからである」と言うが、たしかに障害者が健常者になることはむずかしいので、変わらない状態のレッテルを貼られると、それに対して本人は反発することがむずかしいであろう。田中 [10]は「変えやすいものから変えにくいものへと差別の価値は高まっていく」と言う。変えにくい、つまり、写真のような名札的呼び名が差別につながると言えるのではないだろうか。

４．動画のような行為者的呼び名

では、一枚の写真のようなレッテルとなって限定したイメージを呼ばれる側に貼り付けてしまう呼び名を、残らないで限定したイメージを与えない呼び名に変えよう。

ところで、ことばには音声言語と文字言語がある。この音声言語と文字言語が異なるとウォルター・J. オングは主張している。そして、彼は、「印刷によって思考と表現の世界で長く続いていた聴覚の優位は視覚の優位にとってかわられることになった」[11]と表現している。このことから、視覚情報の「写真のような名札的呼び名」が普及しているので、以前の聴覚優位の音声言語の情報の呼び名をつけることによって、昔に戻れるのではないかと筆者は考える。

なぜ、昔に戻るかというと、文字をもたない「みんなが手話で話した島」[12]と、本のタイトルとして名づけられたマーサズ・ヴィンヤード島では、聴覚障害者に対して名札的呼び名をつけていなかったからである。「聴覚障害者」という名札的呼び名は不必要で、「英語を話す人」のような「手話を話す人」という呼び名が必要だったので

はないだろうか。現代でも実際にマーサズ・ヴィンヤード島同様の地域があったと Margalit Fox[13]が本のタイトルを *Talking Hands* として、手話を「話す(talk)」地域の取材報告をしている。

筆者が提案した手話を話す人「手話者」のような呼び名をそのほかの障害者に考えてみたい。音声言語のように、残らないで消えていくライブの呼び名であれば、レッテルにはならないであろう。では、名札という「もの」ではない限定しない動く呼び名とはどんなものかと言えば、写真ではなく動画のような「～する人」という行為者を表す呼び名はどうであろうか。

５．呼び名を変える

改めて、もう一度「障害者」を表す英語表現を検討して、「～する人」という行為者を表す呼び名が良いことを説明することにする。

an impaired person, a handicapped person, disabled people, gifted children with learning disabilities, physically challengedなどの表現の下線を引いた単語はすべて、過去分詞の形が使われている。

辞書[14]を調べてみると、過去分詞には３種類の用法がある。１つは受け身を表す「～された」「～される」の意味を持つ。２つ目は現在完了・過去完了の完了形に使われる過去分詞で「～してしまった」の完了の意味を持つ。３つ目に、「疑似分詞」と呼ばれる「名詞＋ed」の形をした「～をもつ」「～を備えている」の意味を持つものがある。上記の下線部の中で impaired「損なわせた、悪化させた」 と disabled は「できなくさせた、動かなくさせた」と受け身の意味と同時に「impair してしまった」、「disable してしまった」という完了の意味も考えられる。言い換えると、「障害者にさせられてしまった」という現在までに完了してしまい、この呼び名は今後どうなるかという未来の姿が想像できない。そして、障害者から健常者になるような変化も完了を表す言葉からは想像できない。さらには、本人の意志にかかわらず、「障害者にさせられた」という表現によって、今後の本人の抱負も見えない、その人を限定して束縛した見なし方を示している。この限定した未来が見えない呼び名で呼ばれる本人と周囲との人間関係が良いものとなるとは絶対に言えない。

また、gifted, handicapped, challenged の３つは疑似分詞と考えられる。「(天からの) 贈り物を持っている」「不利な条件を持っている」「(天からの)挑戦を受けた、挑むことを備えている」などの意味が考えられる。この場合は、受け身や完了の場合と異なり、今後の未来も含まれているであろうが、ずっと現在も今後も変わらず、同じ見られ方、同じ見なし方をこの呼び名によってされ続けることは、本人にとっては自分の意志でもないことなのに重荷すぎると思える表現ではないだろうか。gifted と challenged という呼び名は、おそらく社会が気を遣って、「障害者」という呼び名よりも賞賛の意を含んだ善良な呼び名として誕生したものと思われる。しかし、障害者本人は、この呼び名に限定されたイメージの障害者になる、あるいはずっとイメージ通りであり続けることを呼び名に強制されるのではないだろうか。

このような自分の意志のない限定されたイメージで見なされた呼び名より、自分の今後のめざす姿を示す受け身ではなく、能動態の表現で「～する人」と呼ばれるならば、本人が変わり、周囲との人間関係が変わってくると思われる。

では、それぞれの障害者の動画のような行為者的呼び名を提案したい。聴覚障害者の呼び名は「手話する人＝手話者」を筆者は提案したが、聴覚障害者の中でも、手話を使わないで口を読んで、発音する「口話する人＝口話者」や、筆談やメールなどの文字情報を利用する「文字利用者」などと、呼び名を分けることはどうだろうか。

次に、視覚障害者については、点字を利用する人「点字者」、拡大鏡を利用する人「拡大鏡利用者」、音声を利用する人「音声利用者」などはどうだろうか。

身体障害者については、「車いす利用者」「義足者」など、移動や行動するときにどうするかを呼び名とすればよいのではないか。

知的障害者（発達障害）と言われる人は英語で使われている呼び名 slow learner とか、どのようにコミュニケーションするかを示したり、どんなことが得意なのかを示したりする「～する人」という呼び名が考えられないだろうか。

６　おわりに

写真のような名札的呼び名を動画のような行為者的呼び名に変えることは、マイナスイメージの見られ方・見なし方を変えると思われるが、それ以上に、呼ばれる障害者本人の生き方が変わると思える。呼び名には力がある。名札のような呼び名によって限定されて呼び名に束縛され、自分の意志で動くことができないような受け身的気持ちになって、自ら行動しようとも思えず、自活していこうと思えないようにさせているのではないだろうか。では、呼び名を行動することを表すものにするな

らば、呼び名に後押しされて本人が自活しようとするのではないかと想像される。

呼び名が差別的であるから問題であると見られがちだが、呼び名の問題は呼ばれる側の本人の意志で生み出す未来がない呼び名であることが大きな問題であると筆者は気付いた。盲目のピアニスト（辻井伸行）、全盲の弁護士（大胡田誠）、聴覚障害の医者（キャロリーン・スティーン）、盲ろう者の大学教授（福島智）など、その人たちを障害者であると限定して、障害者の枠外でピアニスト、弁護士、医者、大学教授になったからと賞賛する。しかし、彼らは「ピアノを弾く人、ピアニスト」「弁護をする人、弁護士」、「患者の診察をする人、医者」「大学で教える人、大学教授」の呼び名を目指して努力した人たちであって、障害者という呼び名で彼らの人生を限定されなかった人たちであろう。

参考文献

1) 乙武洋匡：五体不満足, 講談社, 東京, 2001.

2) The Translator, Gerry Harcourt: No One’s Perfect, 講談社, 東京, 2004.

3) Michael Chorost: Rebuilt: My journey Back to the Hearing World, Houghton Mifflin Company, New York, 2005.
松山智：僕はサイボーグ, 新風舎, 東京, 2004.

4) L. M. Montgomery: Anne of Green Gables, Yearling, Canada, 1984.

5) Clifton F. Carbin: Deaf Heritage in Canada, A Canadian Cultural Society of the Deaf Project, Canada, 1996.

6) Carson McCullers: The Heart is a Lonely Hunter, First Mariner Books edition 2000, Boston, 2000.
伊藤泰子：マッカラーズとウェルティの作品中の聾者, 愛知工業大学研究報告(46), 57-64, 2011.

7) Frances Itani : Deafening, Atlantic Monthly Press, New York, 2003.
伊藤泰子: Frances Itani の小説 Deafening に見るろう文化, 外国語学論集(9), 27-46, 名古屋学院大学大学院院生協議会, 2008.

8) ウォルター・J.オング著, 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳 ：声の文化と文字の文化, p.38, 藤原書店, 東京, 1991.

9)田中克彦：差別語から入る言語学入門, p.65, 明石書店, 東京, 2001.

10)田中克彦 : 差別語から入る言語学入門, p.66, 明石書店, 東京, 2001.

11) ウォルター・J.オング著, 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳：声の文化と文字の文化, p.249, 藤原書店, 東京, 1991.

12)ノーラ・エレングロース著, 佐野正信訳：みんなが手話で話した島, 築地書館, 東京, 1991.

13) Margalit Fox: Talking Hands: What Sign Language Reveals About the Mind, Simon & Schuster, New York, 2007.

14) 『新英和大辞典 第６版』 研究社
『ジーニアス英和大辞典 用例プラス』 大修館書店

（受理 平成 27 年 3 月 19 日）